

2024 STRENNA

ストレンナ：サレジオ家族 年間目標  
ストレンナ アンヘル・フェルナンデス・アルティメ神父

# ドン・ボスコの夢 わたしたちの夢

～9歳の夢から200年～

The dream  
that makes you dream.

A heart that transforms "wolves" into "lambs"



ストレンナ 2024

ドン・ボスコの夢

わたしたちの夢

～9歳の夢から200年～

Strenna 2024

**"The dream that makes you dream"**

A heart that transforms 'wolves' into 'lambs'

**"Il sogno che fa sognare"**

Un cuore che trasforma i 'lupi' in 'agnelli'

**"El sueño que hace soñar"**

Un corazón que transforma los 'lobos' en 'corderos'

**"Le rêve qui fait rêver"**

Un cœur qui transforme les "loups" en "agneaux"

**"O sonho que vos faz sonhar"**

Um coração que transforma "lobos" em "cordeiros"

今年、2024 年は、少年ジョヴァンニ・ボスコ、われらがドン・ボスコが夢を見てから 200 年の節目を迎えます。それは、世界中のサレジオ家族が「9 歳の時の夢」として大変親しく知るようになった夢です。そして、「ドン・ボスコの生き方、考え方全体を条件づけ、特に、一人ひとりの人生における、そして世界の歴史における神の現存をどのように感じるかを条件づけた」<sup>1</sup> 夢の 200 周年は、今度のストレンナの中心テーマにふさわしいと私には思われます。全サレジオ家族における年間の司牧的歩みを、また、サレジオ世界のあらゆるところで行われている多くの教育的取り組みや、多くの社会的、福音宣教的活動を導くテーマとして、私たちの父のうちに聖霊が興してくださったこの大いなる家族のために、ふさわしいと思います。

毎年、この時期に行うように、ここで差し出したいのは大まかな概要、年末に発表されるストレンナの方向性を示す最初のスケッチです。それを、今、差し出さなければなりません。北半球の教育・司牧の新年度が 9 月から始まるため、そしてストレンナの目指すものが、私たちのうちの少なくない人々にとってきっと助けになると知っているからです。標語に関して、またこの考察の取りうる方向性について助けてくれた兄弟会員とシスター方のグループに感謝したいと思います。また、毎年感謝しているように、扶助者聖マリアの祝日にヴァルドッコで開催される、サレジオ家族世界諮問評議会の貢献に感謝します。その際、私たちは、9 歳の時の夢から 200 周年というテーマが時宜に適っていると、皆で一致しました。

## ■ 1. そしてジョヴァンニは夢を見た...特別な夢を

そう、200 年前、幼かったジョヴァンニ・ボスコは夢を見ました。その夢は生涯「心に残り」、消えることのないしるしを彼のうちに刻みました。生涯を終えるときにはじめて、ジョヴァンニーノはその夢の意味を理解できたのです。

ドン・ボスコは生涯において何度か、その夢について語っています。あるとても重要な時のことを取り上げます。サレジオ霊性の専門家である何人かのサレジオ会員やシスター方は、その時のことを特別に重視しています。ドン・ボスコがドン・バルベリスに、特別な意味を込めてその夢について語ったのは **1875 年** のことでした。その時、ドン・ボスコはすでに 60 歳、サレジオ修道会 (**1859 年 12 月 18 日**)、キリスト者の扶け聖マリア信心会 (**1869 年 4 月 18 日**)、扶助者聖マリア修道女会 (**1872 年 8 月 5 日**) の誕生を目にし、サレジオ協力者の信心会 (ドン・ボスコが名付けた元の名称) がまもなく、**1876 年 5 月 9 日** に産声<sup>うぶごえ</sup>を上げようとしていました。

夢は、解説の形で、次のように語られています：

不思議な夢、夜中続く夢がドン・ボスコを訪れ、なぐさめた。あるとき一度だけ、ドン・ボスコはジュリオ・バルベリス神父に、そして 1875 年 2 月 2 日、私たちに、その夢について親しく語った。これらの不思議な幻の中で、互いに結びつく場面が、さまざまな新たな場面と共に幾度も現れた。しかし、前に現れた場面が視野から全く消えてしまうことは決してなかった。前に現れたものは、新たな夢の驚くべき場面と融合し、すべてはただ一つの点に集約されるようであった：オラトリオの未来に.....

ドン・ボスコは私たちに次のように語った：

---

<sup>1</sup> STELLA, PIETRO, *Don Bosco nella storia della religiosità cattolica. I. Vita e opere*, LAS, Roma 1979, 31s., BOZZOLO, Andrea (ed.), *I SOGNI DI DON BOSCO. Esperienza spirituale e sapienza educativa*. LAS, Roma, 2017, 211 に引用。

「自分は広大な野原にいるようだった。そこには少年たちの大群衆がいて、喧嘩や、暴言、盗み、そのほかいろいろな悪いことをしていた。空中には喧嘩をする者の投げた石がたくさん飛び交っていた。彼らは皆、見捨てられ、道徳心も養われていない少年たちだった。その場を離れようとしたとき、そばに婦人が立っているのに気づいた。『あの少年たちの中に入って行き、働きなさい』と婦人は言った。

私は少年たちの方へ近づいた。でも、何ができると言うのか？ 彼らを集める場所もない、でも助けたかった。離れたところから見ている、助けてもらえそうな人たちに呼びかけ続けたけれど誰もこちらに気を留めようとせず、全く助けてくれなかった。そこで、私は婦人に助けを求めた。婦人は『ここに場所があります』と言い、野原を指さした。

『そこはただ野原です』と私は言った。

『私の子と使徒たちには、枕するところはありませんでした』と婦人は答えた。私は野原で働き始め、相談にのり、教え、告解を聴いた。しかし、自分の努力がほとんど無駄に終わっているのがわかった。親に捨てられ、社会からさげすまれ、拒絶されたその少年たちが集まれる、家となる建物が必要だった。すると婦人は、私をさらに少し北の方へ導き、言った：『ごらんなさい！』

私がそちらに目を向けると小さな教会が見えた。低い屋根、小さな中庭、そこに大勢の少年たちがいた。私は仕事を再開した。でも、教会が手狭になってきたので、私は再び婦人に助けを求め、婦人はもう一つの教会を指さした。それは、はるかに大きく、家が隣接して建っていた。それから婦人はもっと近くへ、この新しい教会の正面のほぼ向かい側にある耕された畑へ私を連れて行った。婦人は言葉を加えた。『ここで、トリノの殉教者、栄光に輝くアヴェントーレとオクタヴィオがいのちをささげ、証したこの場所で、その血を受けて聖化されたこの土地の上で、とても特別な形で神が称えられることを私は望みます。』そのように言いながら、婦人は足を踏み出し、殉教者たちが倒れた正確な場所を示した。私は、戻って来たときにその場所をもう一度見つけるため 標<sup>しる</sup>しを残したかったが、棒も石も何一つも見つからなかった。しかし私は、その場所をはっきりと記憶にとどめた。その場所は、以前、聖アンナ礼拝堂と呼ばれていた、聖殉教者礼拝堂の内側の隅に正確に当たっている；扶助者聖母大聖堂の主祭壇に向かって、礼拝堂の手前左側の隅だ。

その間、私はおびただしい数となりますますます増えていく少年たちに囲まれていた。しかし、婦人に目を注ぎ続けていると、敷地・建物と手段もそれにしたがって増えていった。そのとき、テベア軍団の兵士たちが殉教した場所として婦人が指し示した、まさにその場所に、とても大きな教会が見えた。その周りには数多くの建物があり、その中心に、その美しい記念碑は建っていた。

これらのことが起こり、私が夢を見続けている間、司祭や神学生が助けてくれるのが見えたが、しばらくすると彼らは去って行った。ほかの人々がとどまるよう、できるかぎり何でも試みたが、しばらくするとその人たちも私を一人残し、去って行った。私は再度、婦人に助けを求めた。『人々をとどまらせるためにどうすればよいか、知りたいですか？』と婦人は尋ねた。『このひもを取って、はちまきにしなさい。』私は

うやうや

恭しく婦人の手からひもを取り、「従順」という言葉がひもに記されていることに気づいた。私はすぐに試してみることにし、協力者たちにはちまきとして着けさせた。ひもは見事に不思議なはたらきをし、私はゆだねられた使命を進めた。助け手たちは皆、私のもとを去るという考えを棄て、とどまった。こうして、私たちの修道会は生まれた。

ほかにもたくさんのことを見たが、今、それについて話す必要はないだろう。(ドン・ボスコが言っていたのは、将来の重要な事柄のことだったのかもしれない。) それ以来、私は、オラトリオと修道会のこと、それぞれの地位に関わらず、外部の人々との関わり方について、揺らぐことのない地に足をつけて歩んできた、とえば十分だろう。将来、起こるあらゆる困難をすでに見て、どのように乗り越えればよいか、知っている。はっきりと見える、少しずつ、これから起こることが。私は、ためらうことなく前に進む。教会や学校、運動場、少年たち、神学生や司祭たちが私を助ける様子を見て、そしてこの使徒職全体をどのように進めればよいかを学んで、はじめて私は、人にその話をし、それを現実として語り始めた。そのため多くの人は私の話がばかげていて、私のことを頭がおかしくなったと思ったのだ。」

使命が成功するとのドン・ボスコの揺るぎない信念、あらゆる逆境を前にして恐れを知らないかのようなあの自信、人間の力を超える壮大な事業に取り組みながらも、それをすべて成功させたことの源は、ここにあった。

(出典：メモリエ・ビオグラフィケ第2巻, p.298-301, 英語版 p.232-233)

先に述べたように、この夢が実現したとき、ドン・ボスコは経験豊かな大人でした。すでに多くのことを経験し、多くの困難に立ち向かい、おとめマリアの恵みと愛が少年たちにうちに行う業を、自ら目の当たりにしていました。み摂理による数々の奇跡を目にし、また、少なからず苦しみました。私たちはそのことをよく知っています。

ドン・ボスコが自ら『オラトリオ回想録』<sup>2</sup> (1873年に書き始め、1875年までかかった) に記した9歳の時の夢、その夢を見る前に、父親の死、そして家族が経験した大飢饉という出来事がありました。それはあたかも、人生の悲劇に落胆してはいけないと、ドン・ボスコが冒頭から私たちに教えてくれているかのようです。そのようなことは多く起こりうる、そしてジョヴァンニ・ボスコはそのような多くのことを生き抜いてきた、しかし夢を抱くこと、従う理想を、目標を示す羅針盤を持つことは可能なのだと。その原稿の最初の数行に、ドン・ボスコ自身、記しています：「ところで、この話はいったい何の役に立つのでしょうか。過去から教訓を引き出し、将来の困難を克服していくうえでの拠りどころになるという点で役立つことでしょうか。また、いつ、いかなるときにも、どれほど神ご自身がすべての点で導いてくださっているかを知るうえで役に立つことでしょうか。わたしの子らが、父に関する事柄を読んで、喜び楽しむのに役立つでしょう。そして、わたしが、神に召されて生涯の報告をするためにこの世を去ったのち、彼らは以前にもましてずっと強い関心をもってこの書を読むことになるでしょう。」<sup>3</sup>

<sup>2</sup> 参照 『聖フランシスコ・サレジオのオラトリオ回想録 1815年から1855年』. スペイン語訳および歴史・聖書に関わる注, José Manuel Prelezo García. 序文の考察, Aldo Giraud, Madrid, Editorial CCS, 2003. [訳注: 日本語訳は『オラトリオ回想録』石川康輔／浦田慎二郎 編訳, ドン・ボスコ社より].

<sup>3</sup> 『オラトリオ回想録』 68 頁. BOZZOLO, Andrea (ed.), *I SOGNI DI DON BOSCO*, op. cit., 215 に引用.

## ・ 2. オラトリオ回想録と 9 歳の時の夢を考察、探求する年、そしてストレンナ

後により詳しく書くことについて簡単に要旨を示そうと思うこの数ページで、私が次のように招くことに驚く人もいるかもしれません：夢の 200 周年という時を活かし、オラトリオ回想録と 9 歳の時の夢を考察し、探求しましょう。しかし、私がこのように招くのは深い確信をもってなのです。私自身、この文章を書く前に楽しみながら何ページかを読み、あらためて気づきました。サレジオ霊性のこの領域、私たちの歴史とカリスマの礎の領域において、私たちはごく単純化した決まり文句をただ唱えたり、一般的なことをいくらか繰り返したりするだけに終わる危険があると。私たちが自らに、そして多くの人々、世界中のサレジオ家族、多くの信徒ライチ・協働者と若者、子どもたちに、差し出すことのできる大きな奉仕は、まさに、この夢について何か語る際に、しっかりとした内容のあるものを差し出すことができることです。

私はこのことを強調します。なぜなら、私たちが知っているように、『オラトリオ回想録』は自伝的な著作であり、ドン・ボスコはその中で、聖フランシスコ・サレジオのオラトリオの歴史と共に自らの体験を、起きた出来事に関わることを語り、未来のための貴重な教えと、その体験の最も本質的で豊かなもの、またオラトリオと継続される一つの歴史全体を誕生させた教育的、霊的な事業の最も本質的で豊かなものを、自らの霊的相続人に残したいという願いをもって記したからです。<sup>4</sup>

「このことに、ピエトロ・ブライドは効果的に光を当てた。ブライドは、未来の回想という上手い表現を造り出した。それは、記録というよりむしろ遺言であるという、ドン・ボスコの語り口に読み取れる特質に光を当てるためであった。」<sup>5</sup>

同時に私たちは、回想録という建造物の中に、ドン・ボスコの体験の記述にあるほかのさまざまな要素を支え、その礎となる柱として置かれているこの夢が、次のことをも意味していると捉えます。「司祭、創立者としての立場から、事後に振り返りながら読み直したとき、その夢が出来事に先立つ預言的な顕現であったと、ドン・ボスコは理解せざるを得なかった。」<sup>6</sup>

夢の登場人物やその構造について、あるいは物語の緊張感やドン・ボスコが私たちに伝える夢そのものの展開において起こるさまざまな動きについては、ここでは触れません。それらについては、すでにくつか引用した、サレジオ霊性の書き手によるさまざまな、たいへん豊かで本格的な研究において深めることができるでしょう。

ここでは、いくつかの特徴だけ挙げます。もちろん、それらを発展させて考察することになるでしょう（柔軟に軽やかに、学術的考察としてではなく、今日のサレジオ会とサレジオ家族の生き方とカリスマに当てはめるよう招くものになります）。次のような側面について触れたいと思います：<sup>7</sup>

- 9 歳の時の夢ですでに明らかなオラトリオ的使命：その場面は、少年でいっぱいです。夢の中で、生き生きとした存在感のある子どもたちです。
- 不可能な、達成できないことのように思われる呼びかけ。ジョヴァンニーノ・ボスコは、疲れ切って夢から覚めます。泣いてさえいました。なぜなら、神の呼び

<sup>4</sup> 参照 BOZZOLO, Andrea (ed.), *op. cit.*, 214-215.

<sup>5</sup> P. BRAIDO, *Scrivere "memorie" del futuro*, RSS 11 (1992) 97-127, in BOZZOLO, Andrea (ed.), *op. cit.*, 215.

<sup>6</sup> BOZZOLO, Andrea (ed.), *op. cit.*, 216.

<sup>7</sup> Cf. BOZZOLO, Andrea (ed.), *op. cit.*, 251-268.

かけ（夢の中の主イエスの呼びかけ）の場合、その導く方向は、予測不能で人を困惑させるものでありうるからです。

- 夢の中の婦人の母としての取り成し（その名の神秘と合わせて）。ジョヴァンニーノ・ボスコにとって、自分の母と、日に三度ごあいさつするあの方の母は、人として安らぐことのできる、最も困難なときに安全と保護を見いだす拠りどころとなります。
- そして最後に、柔和と温順の持つ力（今日、私たちは、神の霊への柔和、温順と言うでしょう）。強く、謙遜で、たくましい者になるようにという、夢のメッセージの力。

### ■ 3. スtrenナ の 考 察 を 進 め る 中 で 見 て ゆ く そ の ほ か の 要 素

ここで、2023 年のサレジオ家族諮問評議会の会合、あるいは私たちの作業グループのいずれかからもらった、そのほかの要素や考察を提示したいと思います。これらの側面は、間違いなく、最終草稿に何らかの形で見いだされることになるものです：

- 何よりも私たちは、手の届かない理想のような人としてドン・ボスコを示すことのないよう気をつけなければなりません。ドン・ボスコは現実の、実際に生きていた人です。復活の主とキリスト者の扶け聖マリアに信頼と希望を置き、一步一步、困難に立ち向かった人です。
- 確かに私たちは、9 歳の時の夢をわかりやすく伝え、今日の状況に照らしながらとらえるべき預言として見なければならぬでしょう；神の言葉は、すぐにそこから何らかの結果を得ようと性急に進むのではなく、謙遜と信頼をもって受け入れるべきものである、そのことの例証であることは確かです。
  - ドン・ボスコと共に9歳の時の夢を振り返ることが、ドン・ボスコの摂理への信頼を強調することでもあるのは明白です—「その時が来れば、すべてがわかります。」
  - あるいは、総長パスクアーレ・チャーベス神父が 2012 年のストレンナで宣言したように、私たちは必ず、群れを喰い尽くそうとする「狼に立ち向かう」ことになるでしょう：無関心、倫理における相対主義、物事や体験の価値を破壊する消費主義、偽りのイデオロギーなどです。
  - 夢は私たちを課題に満ちた現代へと運びます。夢の「げんこつはいけない」という言葉は、私たちに挑戦を投げかけ、若い少年少女たちのもとへ出かけて行き寄り添う私たちの取り組みがますます必要であることに気づかせます。憎しみの言葉や暴力が広がり続けているからです。この世界はますます暴力的になっており、私たちは教育者、若者の福音宣教者として、夢の中でジョヴァンニーノを苦悩させたもの、そして今日、私たちをひどく痛めつけ、苦しませるものに対し、別の新たな道を示す者とならなければならないのです。
  - 婦人は先生、母として紹介されます。夢の中の威厳に満ちた主の母であり、またジョヴァンニーノ自身の母です；言い換えれば、ジョヴァンニーノの手を取り、次のように言われる母です：
    - 「ごらんなさい」：私たちが見ることができるといことは、どれほど大切なことでしょうか、そして若者たちの姿を、その現実の中で、ありのままの彼らの姿（最も真実な、美しい姿、そして悲劇的な、痛み

に満ちた姿)を「見る」ことができないとき、それはどれほど深刻なことでしょう。

- 「学ぶ」、すなわち、謙遜に、強く、たくましくなるよう成長すること。なぜなら、単純素朴さ(蔓延する傲慢を前にして)と力(人生で立ち向かわなければならぬ多くのことを前にして)が必要であり、不屈の精神(失望したり、何もできないとうなだれたりしない心)となるのは、たくましさだからです。
- 「そして忍耐しなさい」、すなわち、すべてに時が必要なこと、神が神であることをわきまませましょう。

## 4. それは夢見させる夢

夢について、将来を示すもの、ドン・ボスコに与えられた召命のプロジェクトとしてだけ捉えるのではなく、振り返ることが基本的な視点となります。ドン・ボスコがローマのイエスの聖心大聖堂で、ミサをささげながら流した涙を、自らの生涯を読み返したこととしても捉えることです。主が自分の生涯の主役であられること、すべてが主のみ手の中にあること、そしてこの夢が、サレジオ会員の夢、ドン・ボスコの子ら、全サレジオ家族、特に今日の若者の夢であると、捉えることです。

その意味で、この夢は私たちに夢を見させ、自分たちが何者であるか、今日、誰のためにあるのか、考えさせるのです：

- ドン・ボスコの選択の一つひとつは、大きな計画：**ドン・ボスコのための神の計画(夢)**の一部でした。そのため、ドン・ボスコにとって、ありふれた選択などありませんでした。
- 私たちの多くは、**神が私たち一人ひとりに夢を持っておられる**ことに気づいていません。それは神ご自身が私たちのために考案され、望まれ、私たちに合うように作ってくださった夢です。私たちが切に望む幸せの秘訣は、まさに、二つの夢：私たちの夢と神の夢が出会い、呼応することにあるのです。
  - 私たちにとって神の夢が何であるかを理解することは、第一に、**私たちのさまざまな限界を含め、それにもかかわらず、私たちをありのまま愛してくださったので、神は私たちにいのちをくださった、と気づく**ことです。したがって、神が私たち一人ひとりのうちに大いなる業を行いたいと望んでおられることを、私たちは信じなければなりません！ 私は尊い、なぜなら、私がいなければ達成されない何かがある；私だけが愛せる人々、私だけが言うことのできる言葉、私だけが体験できることがあるのです！
- 神はさまざまな方法で語られます、「**貧しい道具**」で**大いなる業を行われます**。私たちの心の深みで、私たちの内なる感情の動き、私たちが信仰をもって受け入れ、忍耐をもって深め、愛をもって内面化し、信頼をもって従う神の言葉を通して、み業を行われます。

- 自分自身に耳を傾けることを学ぶのが大切なのは、そのためです。内面の動きを読み解くこと、自分の中で揺り動かされているものに声を与えること、どのしるし、または「夢」が、私たちに語りかける神の声を示すものであるか、あるいはその反対に、間違った選択の結果であるか、気づくこと。
- 人生において、選ぶこと、夢見ること、決断することはすべて、その選択に伴う結果に責任を持つことを意味します。そこから、不安、心の重さ、恐れさえ生じることがあります。
- 聖書文中に最も頻繁に出て来る言葉の一つは、確かに「恐れるな」という言葉です。神によって、あるいは神の使いによって、もっぱら発せられるこの言葉は、ほとんどの場合、召命の呼びかけです。すなわち、その呼びかけを受ける人を全面的に関与させる人生の計画を実現するようという招きです。興味深いのは、それがしばしば、そのメッセージの受け手の心を圧倒する恐れに先立つ、あるいはその恐れに答える言葉であることです。恐れは、示された使命に対し、力不足を覚えることから生じます。
  - その意味で、教皇聖ヨハネ・パウロ二世のあの幸いな言葉は、何と力強く、今も響くことでしょうか：「**恐れなくてください!**」
- 先に触れた「謙遜で強く、たくましくなりなさい」という言葉は、物事への取り組みを簡単にあきらめたり、必要な責任を取らずに何でも天から降って来るのを待ったりする誘惑を乗り越えるために役立ちます。その誘惑を**力**をもって取り除き、その影響を**謙遜**をもって無くさなくてはなりません。自らの限界を認識しながらも、多くの可能性があること、神がいつも共にいてくださることを頼みにできると知っている者の、力と謙遜です。
- 若者はしばしば、人の夢の影響を受けています：親の夢でしょうか？ 友だちの夢、あるいは社会による条件づけでしょうか？ すでに述べたように、**神が私たち一人ひとりに夢を持っておられること**、神ご自身が私たちのために考案され、望まれ、一人ひとりに合わせて作られた計画があるということの確かさから、**若者の夢を、彼ら自身と共に探求する**ことが必要になります：人生には生きる理由があり、若者の存在の美しさを、私たちは信じなければなりません；私たちは、大いなる望みに心を開かなければなりません、一人ひとりの若者への神の夢ほどに大いなる望みに。そして、その実現のために奮闘しなければなりません。
- 若者は、真の自分を生きるよう呼ばれています：そのアイデンティティーは、今、聖性へと若者を招く、満ち満ちたいのちです！
- **私たちは、自分自身と自分の夢を築くために、他者を必要とします。**自分一人では、識別はできません。信頼すること、ゆだねることが必要です。子どものドン・ボスコは、信頼して「先生」の導きにゆだねました。このことは当然、知恵ある、福音的な光に照らされた、信頼できる導き手がいるということを前提とします。このことについても、私たちには良き務めが用意されているのです。

\*\*\*\*\*